

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520451

研究課題名(和文) インド東部・オリッサ州の定住ベンガル人社会における言語接触に関する記述的研究

研究課題名(英文) A descriptive study of the languages in contact in the Bengali community in Orissa, Eastern India

研究代表者

山部 順治 (YAMABE, Junji)

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00330598

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の研究対象は、インド東部・オリッサ州のベンガル人社会において話されている2言語、オリヤ語とベンガル語の非標準的な一変種である。両言語は、系統的には印欧語インド語派に属す。現地調査を研究期間4年間の毎年1ヶ月ずつ実施した。ここでは、両言語の文法と音声の諸事項に関して、諸事実を体系的に記録し、また、特異な事象を発掘した。また、両言語を日本語の標準語や方言を含む世界の言語と対照させて考察した。これによって、インドの両言語や世界の言語のありかたについて新たな理解をもたらした。

研究成果の概要(英文)：The objects of this study are the two languages spoken in the Bengali community in Orissa (Odisha), India: Oriya (Odia), and a nonstandard variety of Bengali. They are both genetically Indic, Indo-European.

Field research in Orissa was conducted for one month each year during four-year grant period. This gave systematic descriptions of aspects of the grammar and phonology of the two languages, and also brought to light peculiar facts. The two languages were compared with world's languages including the standard and dialectal varieties of Japanese. This yielded new ideas on the characters of the two Indian as well as the world's languages.

研究分野：3

科研費の分科・細目：3

キーワード：インド語学 オリヤ語 ベンガル語 文法 歴史言語学 社会言語学

1. 研究開始当初の背景

対象 本研究の対象は、インド東部・オリッサ州の定住ベンガル人コミュニティのいて話されている2言語 オリヤ語と、ベンガル語の非標準一変種 である。

同コミュニティは、二言語併用の状況にある。成員は、オリヤ語（オリッサ州の公用語）とベンガル語の一変種の両言語を母語とする。日常生活では、前者を家庭の外（学校・職場・近所づきあい）、後者を家庭の内（家族や親せきどうし）と使い分ける。オリヤ語とベンガル語は、系統的には印欧語インド語派に属す。

以下では、研究対象のベンガル語非標準的変種を、調査地カタック市の地名を取って“カタック・ベンガル語”と呼ぶ。

既存研究 関連する既存研究は、次のようであった。まず、本研究の題材「オリッサ州の定住ベンガル人社会のことば」についてや、同州における他の移住者コミュニティのことばについては、既存研究は見当たらなかった。一方で、本研究は次の3研究領域における長年の蓄積や最近の動向と関連する。世界各地における言語接触ないし多言語並用の事例の研究。南アジア地域起源の移住少数派コミュニティで、オリッサ州外における事例について、英国領植民地時代から現代まで続く研究蓄積。例えば、インド南部各地における諸事例、ヨーロッパ地域におけるロマ（いわゆる、“ジプシー”）近代以降の海外への移民の事例について。オリッサ州の定住ベンガル人社会について、歴史上の政治・文化的に果たした人脈が、政治史・文化史の論考。

2. 研究の目的

研究代表者（山部）は、1991年以來、インド東部・オリッサ州でオリヤ語の調査を行っている。最近十数年間の調査調

での主要な情報提供者は、オリッサ州・カタック市の定住ベンガル人である。氏の言語的知識や氏の所属する社会の慣習を調査することにより、同オリヤ語とカタック・ベンガル語それぞれの特徴を記録すること、またそれを基にして言語変化や二言語共存という研究課題に知見をもたらすことを意図した。

研究代表者は、勤務地（岡山市）の方言や標準的日本語に関しても、調査を行っている。日本語とインドという二地域の言語を対照することによって、両事例の特徴を浮き彫りすること、また、言語理論へ実証的により堅実な貢献を目論んだ。

3. 研究の方法

本研究は、資料の収集とその整理に力点を置いた。

各年度一か月間、インド・オリッサ州・カタック市で、調査を実施した。オリヤ語とカタック・ベンガル語について、1人の話者との面接を期間中毎日4時間～5時間行った。少数の項目については、この話者以外の数人にも情報提供を求めた。調査項目は、4年間で継続的に発展させていった。特に、格の用法や韻律特徴について重点的に調べた。記録方法としては、ノートに筆記し、一部をパソコンに入力した。その他、録音、映像によった。

国内では、インドで実施した調査で得た資料を整理した。同調査で得た資料に基づき、オリヤ語とカタック・ベンガル語について、次の論点について考察した。共時的に、それぞれの言語の文法の分析。両言語の構造的な異同と、社会内での共存実態。歴史的に、現状へ至った経緯。

日本語についても、勤務地の方言や標準語について研究を行った。インターネット

や多人数アンケートを継続的に行い資料を収集した。文法構造、言語内での変異変異、言語接触について考察した。

4. 研究成果

(1) オリヤ語に関しては、文法の諸側面と音調について、資料を収集し、分析をおこなった。

オリヤ語についての発表論文は、同言語に特有な3点の事象(下記)の存在を報告し、考察を行ったものである。これらについてはいずれも、世界の諸言語に散見される原則がオリヤ語においては特異な現れ方をしていると捉えることができる。オリヤ語における現れ方の特異点とは、言語間の類型的相違を構成するものとされている相反する特徴が、オリヤ語一言語内で構文によって住分けているという点である。オリヤ語の事実に基づく考察により、制約の通言語的なバリエーションの幅に関してや、制約の理論的な特徴付けに関して、新たな知見を得た。

発表論文(下掲)。オリヤ語において、ある特定の構文(のみ)において、1人称あるいは2人称名詞句が目的語になることができない。同論文では、この事象の存在を指摘し、輪郭を描き、類型論的な分析を行った。

発表論文。オリヤ語においては、二重他動詞制約(目的格の名詞句の連続を禁止する制約)が構文環境によって、働いたり働かなかったりする。同論文では、この事象の存在を指摘し、その輪郭を描き、また原初的な分析を行った。

発表論文。オリヤ語においては、動詞の自他の表示は、動詞の現れる環境によって行われたり行われなかつたりする。同論文では、この事象の存在を指摘し、その輪郭を描いた。

(2) カタックベンガル語については、主に、

この言語の基本的構造に関する項目について調査を行った。この他、オリヤ語の調査と並行した事項についても調べた。同言語の全体的輪郭、および、いくつかの項目に関して同言語・オリヤ語・標準ベンガル語の間の異同を、明からにできた。

(3) 日本語に関しては、発表論文と学会発表において、意味と語順のミスマッチを含む表現を指摘した。補助動詞数点と2つ助動詞が関わるもので、文の構成要素の総体的意味的スコープと語順(形態素順)とが、逆転している表現である。この事象について、これが過去に生じた動機付が何だったか、および、その過去から近未来にわたる通時的変遷はどのようなものであるか、推定した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

山部順治 (2014) 「オリヤ語」、庄司博史(編)『世界のことば読み方事典』6ページ、丸善出版、印刷中、2014年9月出版予定

山部順治 (2013) 「オリヤ語オリヤ語の複合述語にかかる人称制限」『日本言語学会第148回大会予稿集』pp.296 - 301.

山部順治 (2013) 「オリヤ語における二重目的格制約」『日本言語学会第147回大会予稿集』pp.296 - 301.

山部順治 (2013) 「オリヤ語における、動詞に自他性を標示する構文とそうしない構文」『日本南アジア学会第26回全国大会報告要旨集』pp.10-11.

山部順治 (2013) 「形態素順序に関する、現在進行中の変化—複合動詞の使

役形・受身形—」『ノートルダム清心
女子大学紀要日本語日本文学編』37,
pp.111 - 130.

山部順治 (2012) 「ディヴェヒ語」『新
版 南アジアを知る事典』辛島昇、他
(編)平凡社

山部順治 (2011) 「複合動詞とヴォイス
辞がからむ語順変異 「監督が選手た
ちを{競争し合わせる~競争させ合
う}。」」『日本言語学会第142回大会
予稿集』、pp.164 - 169.

山部順治 (2010) 「現在進行中の文法
変化 補助動詞「おる」から「おく」
へ」上野善道(監修)『日本語研究
の12章』明治書院, pp.98 - 113.

〔学会発表〕(計2件)

山部順治 (2013) 「通時的な用法拡張
と、共時的な用法間のつながり 西
日本方言の補助動詞「おく」」九州
方言研究会第36回研究会、7月13日、
福岡大学

山部順治 (2011) 「日本語で現在進行
中の語順変化」日本歴史言語学会第1
回大会、12月18日、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山部 順治 (YAMABE, Junji)
ノートルダム清心女子大学・文学部
・准教授
研究者番号：00330598